

慢性痛
急性痛

香曾我部義則先生の今月のカルテ

vol.99

ペインクリニックの現場から

梶木病院麻酔科・ペインクリニック科の香曾我部義則先生と藤井洋泉先生が、痛みの治療や緩和についての情報を届けてくれる「ペインクリニックの現場から」。前回に続き、香曾我部先生による運動器と痛みの関係についてです。

さないことで関節に不動が生じて起こり、期間が長くなるほど拘縮は進行します。1、2週間の不活動状態でも筋腹へのコラーゲンが増生し変性することで肥厚が起こり、筋肉自体の柔軟性が失われ、筋が短くなり伸びにくくなります。4週間を超えて不動化が続くとコラーゲンそのものの動きが悪くなり、筋膜は伸張されなくなり、1週間間の安静で筋力は10〜15%、4週間で半分に低下するといわれています。委縮とは骨格筋の容積の縮小を意味し、多くは身体の不活動により生じます。この筋委縮を廃用性

運動器は身体を構成、それらに結合する骨格支持し、身体運動を可能にする器官です。自らの意思で動かさず、立つ、歩くなど身体活動を担う組織であり、日常生活を送るうえで不可欠です。全身の骨格・関節と、

高年齢者では病气や術後のベットレストが長期になれば寝たきりの原因となります。筋委縮や拘縮以外にも骨粗しょうや起立性低血圧、括約筋障害(便秘や用便失禁)、精神的合併症、床ずれを伴うような安静状態が長期間続くこと心身のさまざまな低下状態が生じ、これを廃用症候群といえます。組織の不活動状態はそれ自体が痛みを生じさせ慢性とう痛の発生をもたらします。不動化は脳への刺激も当然低下し、認知障害の元ともなります。不動化が諸悪の根源と理解しましょう。

■プロフィール こうそがべ・よしのり 昭和54年に岡山大学医学部卒業後、同大学麻酔科・蘇生科講師、岡山労災病院麻酔科第一部長に。平成16年から現職。日本麻酔学会指導医。日本ペインクリニック学会認定医。現在日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、国際疼痛学会などに所属



筋、腱、靭帯、関節包などの固定術は、患部を固定し、損傷した組織の治癒に必要ですが、処置によって「拘縮」や「筋委縮」などの運動器の機能障害を引き起こします。機能障害を予防・治療するためにリハビリテーションが重要ですが、リハビリは痛みを伴い、痛みに負けて不活動になると痛みの増悪も

体を動かさないことで関節に不動が生じて起こる拘縮、筋委縮 脳へも影響する不動は「諸悪の根源」との理解を

お答えは、梶木病院(北区西花尻)の香曾我部先生です。08006(29) 03)0201016